

私事にわたって恐縮ながら、父が亡くなつてまる三年となる。

大正十五年生まれの父は陸軍に召集されたものの終戦を内地で迎え、戦後の十年間、母とともに舞台の演劇に打ち込んだという人であった。戦後間もない頃であっただけに、明大演劇部の時代を含めて人に教えることも多かつたようだ。山田吾一さんやいずみたくさん（もともと演劇出身）といった方々のお名前も仲間を語るなかで何度か聞いたものだ（その後演劇好きのDNAは私をスルーして

おじき（父の兄）も若い頃は国労の青年部で、のちの共産党書記局長金子満広と競い合ったそうだ（紆余曲折があつたようである）その後金融機関へ転職した）。

そんな血筋のなかで、私もなにがしか反骨精神のDNAは受け継いでいると思つてはいるのだが、昨今の状況においては、率直に言つてその發揮の仕方は一筋縄ではいかない。

しかしいづれにしても労働組合の役員という存在は、それぞれの立場なりにこの反骨精神というやつがないとふらついてしまう。良

暮らしの底上げ



第51回

反骨精神と
元気なからだ

三人の子供たちに隔世遺伝で引き継がれた）。

しかし残念ながら演劇では子供を養いきれぬということであつたかと思う。私が生まれた翌年に開局した日本教育テレビ（現在のテレビ朝日）に入職し、以来テレビマンの人生を送つたが、終生、反骨精神が旺盛であつた。

寝たきりになり認知症を患つてからも、私が連合の事務局長になつたことを心から喜んでくれた。妹がみせたスマホのニュース画像に登場する私をみて、「大衆に貢献する息子をもてうれしい」などと話していた。

意味で頑固であることが求められる。そして究極のところ、「いつ何に対して」頑固を貫くかが常に問われるのだ。

野党が国民の期待を受けとめる受け皿になり切れず、現政権の支持率も多少の波はあつても高水準を維持している。そんななか気になるのは若年層の方々における受身的思考の広がりである。最低賃金の引き上げや同一労働同一賃金、長時間労働の是正等々、皆もともと連合が主張してきたことだ。ネズミをとる猫は白かろうが黒かろうが良い猫なので前

に向かつて補強すべく参画してきているが、若い人たちのなかで「だまつても政府は良いことをやってくれるんだ」などという意識が広がつてしまわないかが大変気がかりだ。現在のシニア層がかつて醸し出していた時代の雰囲気からはかなり変化してきている。

病床でも反骨精神を垣間見せた父であつたが、残念だったのは最後の一年半弱は点滴が頼りの病床人生だったことだ。認知症も入ってしまったなかで、からだの苦痛を余儀なくされたり、種々の妄想に悩まされたりもして

いた。

健全な反骨精神は民主主義の基盤であり宝だ。宝はしっかりと引き継いでいきたい。そのためにもジジババの皆さん（私も含めて）、しっかりとした運動・食事で元気なからだをキープしていこう！

連合
会長 神津里季生



こうづ・りきお 1956年、東京都生まれ。東京大学在学中は野球部マネジャー。卒業後、新日本製鐵株式会社入社。新日鐵労連会長、基幹労連中央執行委員長などを経て、2015年、日本労働組合総連合会会長に就任